

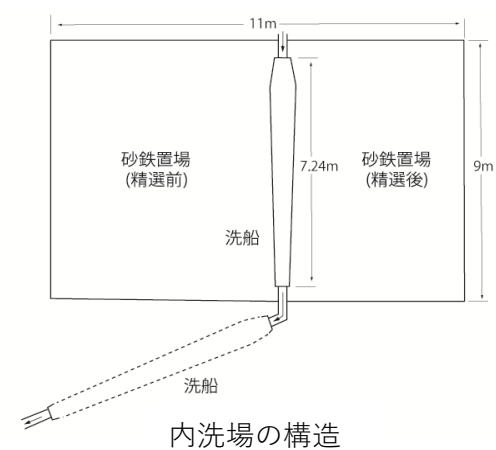
3. 内洗場跡・水路跡

2025.6.28

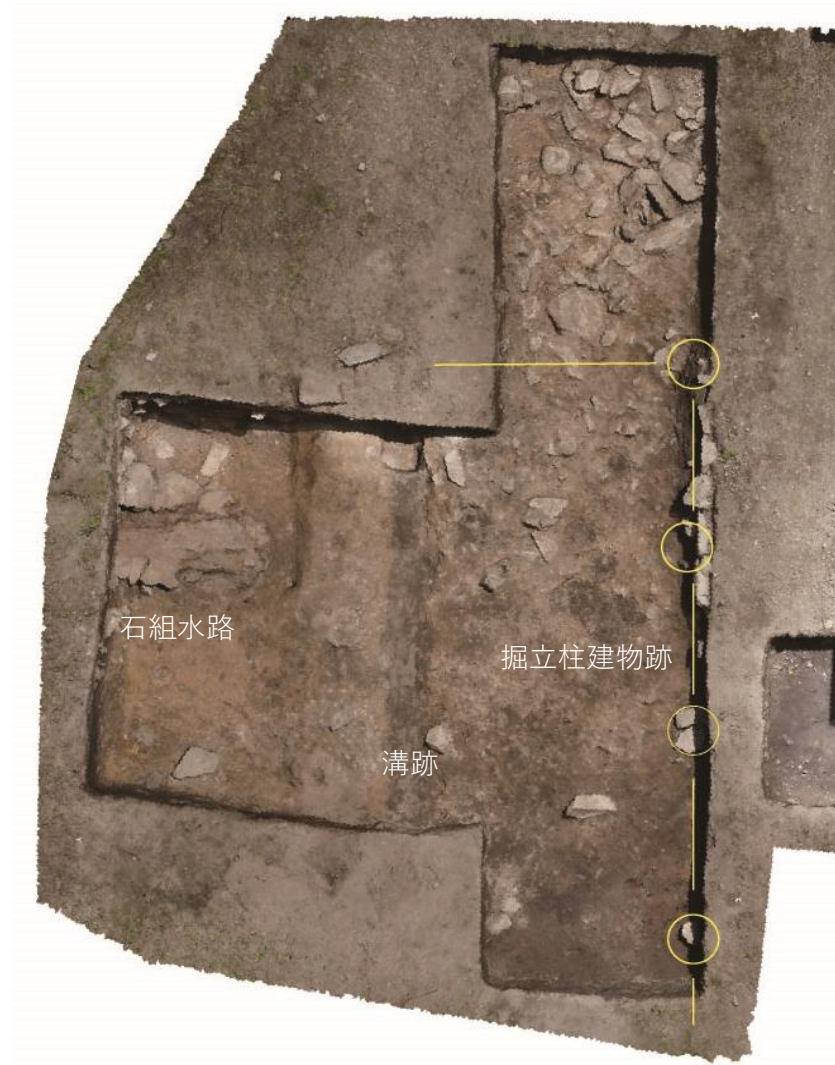
内洗場は、鉄穴から持ち込まれた砂鉄を再度洗い直し、砂を取り除いて砂鉄の含有率を高めるための施設です。洗船と呼ばれる木製の水路が設けられ、砂鉄を入れて攪拌し、比重の軽い砂を流すことで、砂鉄を精選しました。

内洗場は、田部家文書によれば「曾木葺 間口四間半 奥行二間半」と記されており、建屋があったことがわかります。調査の結果、建屋の柱穴を3間分を確認することができました。洗船など主要な施設を明らかにすることはできませんでしたが、砂鉄を含んだ溝や杭跡、石組水路などがありました。

内洗場の南側では、水車へ導水する石組みの水路跡が確認されました。水車は、元小屋の棟続きにあった中銅場・小銅場のもので、鋳を小割にする銅と呼ばれる重りを吊り上げる動力として使われました。



水車の水路跡



内洗場跡の掘立柱建物跡

菅谷たたら山内発掘調査現地説明会資料

雲南市教育委員会

菅谷たたらは、松江藩屈指のたたら経営者田部家が、寛政4年（1792）から大正12年（1923）まで操業しました。第2次世界大戦時には、出雲製鋼株式会社が昭和14年（1939）から3年間、操業を行っています。

菅谷たたら山内には、江戸時代終わり頃に建てられた高殿や元小屋、明治時代の米倉などが現存します。昭和42年（1967）に国重要有形民俗文化財に指定され、たたら製鉄が栄えた当時の様子を現在に伝えています。

雲南市教育委員会では、菅谷たたら山内のうち土蔵跡と鉄池跡b、内洗場跡の発掘調査を行いました。調査の結果、土蔵の規模、鉄池bの新旧2段階にわたる構築状況、内洗場を覆う建物などが明らかになりました。



発掘調査地点の位置（田部家文書「菅谷鉦山内絵図」）※黄色枠が調査箇所

1. 土蔵跡

土蔵は、田部家文書によれば、「曾木葺 間口三間半 奥行二間半」と記録されています。調査の結果、土蔵の基壇は割石積みで、梁行5.4m（3間）・桁行7.2m（4間）の規模がありました。土蔵は、明治30年代頃とみられる絵図に記載されており、昭和初期頃までは残っていたようです。

菅谷たたら山内には、銑蔵、米蔵、大炭小屋のように、鉄・米・炭専用の蔵があります。土蔵に何が納められていたのかは不明ですが、こうした物品以外のものが納められていたと推定されます。



土蔵跡



大正時代の菅谷たたら山内

2. 鉄池跡

「菅谷鉦山内絵図」には、青色に塗られた「鉄池」2ヶ所に図示されています。仮にこれをa・bとすると、鉄池aは鋳を入れて冷やすための施設です。鉄池bは、鉄池aの南側に描かれており、水路が米蔵と本小屋の間に延びています。鉄池aとは異なる役割をもつ施設であったとみられますが、その機能ははっきりしません。

調査の結果、鉄池bは新旧2段階にわたって、構築されたことがわかりました。旧段階の池は、石の多くが抜き取られていますが、幅2.4mの規模があります。新段階の池は、旧段階一部を壊して構築されており、長さ3.2m・幅1.7m・深さ0.6mです。北側の短辺には鉄池aの排水口と繋がる給水口があります。中膨らみになった石組みが水路へと続く部分には、堰板をはめる溝があり、水を溜める機能をもっていました。鋳を冷やす鉄池aより導水されているためか、池の底は鉄分が厚く固着しています。

旧段階の池は規模が大きく、復原すれば米蔵の前まで延んでいます。米蔵が建設される明治10年（1877）以前の施設であったとみられ、米蔵が建てられた際に新段階の池が造られたと考えられます。



鉄池b跡の構築状況